

## 巻頭言——植村邦彦先生のご退職にあたって——

2022年3月末をもって植村邦彦先生が退職を迎えられます。ここに長年にわたる関西大学および経済学部に対する先生のご貢献に感謝の意を表するとともに、ご退職にお祝い申し上げる次第です。

植村先生は、1981年一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程を単位修得退学された後、熊本大学文学部講師、同助教授を経て、1994年関西大学経済学部にて社会思想史担当の教授として着任されました。以来28年間の長きにわたり教育と研究にご尽力されるとともに、大学理事、大学協議会協議員、学部執行部（学部長・研究科長、学部長代理、入試主任）、生協理事といった役職を歴任し、大学ならびに学部の発展に寄与されてきました。

植村先生は、近代ドイツ（特にマルクス主義・ユダヤ人問題）を中心とするヨーロッパ社会思想史の研究に一貫して取り組んでこられました。最初の単著『シュルツとマルクス——「近代」の自己認識』（1990年）によって1991年に一橋大学より博士の学位を授与されました。その後も休むことなく着実に研究を進められ、9冊の単著をはじめとする数多くのご業績を残され、わが国の社会思想史研究を牽引してこられました。また、社会思想史学会で常任幹事・幹事を、経済学史学会で幹事を務められるなど、学会活動も精力的に行われてこられました。

植村先生のご研究の特徴は、歴史的コンテクストを重視した緻密な実証的思想史研究でありながら、それが同時に、すぐれて現代的なメッセージ——私たちの生きる現代社会で自明視されている通念の問い直しの重要性——を放っている点にあるように思われます。教科書として執筆された『「近代」を支える思想——市民社会・世界史・ナショナリズム』（2001年）の「あとがき」で植村先生は、社会思想史の授業で学生に何を伝えるべきかについていつも思い悩んできたことを告白され、「私たちはどのような思想に規定され拘束されているのか、それを自覚することは、私たちの生活を未来に向けてよりよいものにしていくための前提条件であり、第一歩である。まだ第二歩ではないにしても」（285頁）という希望を記されています。植村先生の学部ゼミナールが常に学部内でトップレベルの人気を博していた理由は、こうした学生教育に対する真摯な態度とそれに裏打ちされた社会思想史研究の現代性にあったような気がいたします。

最後になりますが、植村先生のこれまでの教育と研究へのご尽力に感謝するとともに、今後も何卒健康に留意されて、これまで以上にご活躍されることを祈念いたしまして、退職記念号によせる言葉といたします。

2022年3月  
編者を代表して  
中澤 信彦

